

## 子どもは豊かな遊びの世界を生きている③

## 遊びで育つ「コミュニティケアの心

河邊貴子

(大学教員)

## 「コミュニティケアの心

本ページの下部に記されている筆者の紹介の中に「医療と地域と子どもをつなぐNPO活動もライフワークの一つ」とあるが、今回はその活動で出会う子どもたちの話をしようと思う。

私は東京郊外にある「ケアタウン小平」という施設の子育て支援事業担当理事をしている。という子どもたちのための施設と思われるかもしれないが、一階にデイサービスセンターと訪問看護ステーションや診療所があり、二階と三階にはケアを必要とする一人暮らしの方が住んでいる。「コミュニティケアリンク東京」というNPO法人が運営している医療と福祉の複合施設である。利用者の大半がお年寄りの施設に、どうして子育て支援の機能を持たせているのか。

現在の日本では、「病人は病院へ」「高齢者は福祉施設へ」「子どもは学校へ」とそれぞれがそれぞれの施設に「囲われる」傾向が強くなっている。ほんの何十年前には地域の中で支え合って暮らしていたのに、それが難しい時代。もちろんそれぞれのニーズに応じた適切な環境の充実は必要なことだが、同時に、地域に支え合いの心を育てることも大切だろう。子どもは本来的に

河邊貴子（かわべたかこ）

聖心女子大学文学部教授。専門は幼児教育学。主な研究課題は保育記録論、遊び援助論。医療と地域と子どもをつなぐNPO活動もライフワークの一つ。

は支え合いをいとわれない存在だが、その力を發揮できる場が暮らしの中で提供されていないのが現実である。そこで、「ケアタウン小平」という場を核として、地域から失われた支え合いの機能を再生し、「コミュニティケア」の理念を広げようというのである。ここで私たちが目指しているのは、異世代間のかかわりを深め、子育てがしやすい地域づくりへの貢献と、「小さな市民」としての子どもたちに活躍の場を提供することである。具体的活動の一つに、「集まれ子ども広場」という遊びの会がある。参加年齢は小学生を中心に幼児から中高年までと他に例を見ないと思われるほどに幅広く、私たち大人も子どもと一緒に（同等に）遊ぶ。実施回数は百回を超えた。

## 子どもたちの遊び心

子どもが考える遊びがとにかく面白い。例えば、数年前の秋、定期的に運動会の話題が挙がり、その流れの中で、「来月はケアタウン小平でも運動会をやるうよ」「学校の運動会では絶対にできない競技をやるうよ」ということになった。内容は全部子どもが考えて準備する。

最初の競技は「マシユマロぱつくん競争」。建物の二階から下がっている植栽の先に大量のマシユマロをぶら下げて、みんなで食べるとする姿は滑稽こっけいで、見ていても面白いし、参加者は楽しくて必死になってマシユマロを食べようとする姿は滑稽こっけいで、見ていても面白いし、参加者は楽しくて仕方がない。これを考えたのは小学校五年生のユキちゃん、繰り返しの参加を通して「場」の利点を十分に感じ取っているからこそその競技だった。マシユマロに糸を通す作業は、手がベトベトになってなかなか大変なのだが、ユキちゃんたち三人の小学生は根気強く百個のマシユマロに糸を通し切った。みんなが喜ぶ姿がすっかりイメージされているから頑張れるのだろう。身長

の低い幼児のために一部は糸を長くする配慮も忘れない。

次の競技は「お鍋のふた合わせ」。家庭から持ち寄った鍋の本体をあらかじめ施設内の至る所に隠しておく。競技者はふたを持って走り回り、ぴったりの鍋を探し当てる。ここでは大人も手を抜かず遊ぶので、優勝者は六十四歳のアツコさんだった。その次は「小枝ちゃんを探せ」。小枝の形をしたチョコレート菓子をラップに包み、中庭に隠し、それをみんなで見つけて食べる。ところが、チョコだと思つて喜び勇んで開けると本物の小枝だったりするので気を抜かない。これを考へて準備したのは幼児五名である。小学生や大人が自分たちの隠したお菓子を一生懸命に探す姿をニマニマしながら見ていて、「やられたあ、これは本物の枝だ」と悔しがる姿を待ち望んでいる。遊びの会を始めた当初はそこまで気が付かなかったのだが、こんな一見ばかげた遊びに熱中する子どもの遊び心の中に、コミュニケーションの本質がすでに芽生えている。

### 遊び心に見られる「コミュニケーション」

第一に、いつも子どもたちは遊び仲間が最大に力を発揮できるように考えようとするのだ。小学生がマシユマロの糸を幼児用に長くするのは、その人なりの挑戦具合を判断しているからなのだ。どの程度の長さだと幼児にとってちょうどよい難しさかを考えている。鍋のふた合わせも同じ。草むらのどこに鍋を隠せば大人には見つけにくいかを考えている。

遊びというのはあまり易しくもつまらないが、難し過ぎても挑戦意欲が低下するものだ。繰り返し遊び込んでいる子どもたちは、直観でその人なりの「ちょうどよい負荷」を判断し、環境を準備しているようなのだ。もちろん、小学生はいつも幼児に思いやりをもって行動しているけ

れど、単に「いたわる」ではなく、小さな子どもなりにその子の力が発揮できるにはどうしたらよいかを考えている。みんなが楽しまなければ遊び全体が面白くならないことを知っているのだ。私は子どもたちから「さまざまな世代が共に心地よく暮らす社会のために、なくてはならない考え方」を教えられている。

第二に、思いつ切り羽目はずして「今」を楽しもうとしながら、ある種のバランスも保とうとしていること。

経験のある方は思い出してほしい。昔の子どもはワルダクミがうれしい遊びをよくやったものだ。落とし穴を掘っている時のワクワク感、誰かをそこまで誘導してくる時のドキドキ感、そしてうまくワナにはめた時の達成感。もちろん、本当に人をだますことはいけないことだが、そこにある種のユーモアと節度を保持することによって、この手の遊びは結果として笑いに包まれ、人間関係がより深まるのだった。そして時にやり過ぎて失敗することもあり、「悪質なふざけ」と「遊びの喜び」の違いを判断できるようになっていったのではないか。

今の子どもたちは規制と禁止に囲まれていて、思いつ切り楽しむ方法を考えながら遊ぶ機会を奪われている。これでは、ある種の秩序や調和がないと実は遊びは面白くならないことに気付けないのではないか。本物の小枝をチョコレートにまぜておいた幼児たちは、ユーモアと節度が人と人を結び付け、人生を楽しくすることを知る第一歩を踏み出したのだと思う。

今回の遊びのテーマは「焼き芋」。実際に芋を焼くのではなくビニール袋をかぶって落ち葉をかけてもらい「お芋の気持ち」になってみるのだという。大人の私でさえ、今からワクワクするな。